

大隈言道自筆資料『自詠集中抄』

—言道門下小林重治家集— (四)

進藤 康子

前号に続き、江戸時代後期に活動した福岡の歌人大隈言道門下の中心人物の一人、飯塚の小林重治の家集を紹介する。師大隈言道が添削を加えた後、言道が自ら清書したものである。師による浄書本は、門人のなかでも特別な門人谷川幹辰（たにがわもととき：福岡の門人。長澤伴雄編『類題和歌鴨川五郎集』に数首入選）など数人にしか与えていない。言道の家集『草径集』出版の際、多大な費用を援助するなど言道最大のパトロンであり、論集第十巻第一号で一部触れた様に、旧姓を「木村」と称したこの小林重治は、後で姓を

「木村」に戻した。その詳細は、豊臣秀頼に仕え大坂冬の陣に佐竹・上杉と戦い功をあげた、重治の十二代前の先祖の木村長門守重成は、大坂夏の陣では井伊直孝と戦って元和元年に殉じた。その子の千代丸重基が、徳川幕府の目を憚って、小林喜右衛門と改称し飯塚に住み、それ以来小林姓を名乗ったという。飯塚市西町の墓地の一角に「木村長門守息千代丸墓」がある。

そして、維新後に木村姓に復し、明治七年三月二十八日に重治は六十歳で没した。蔵書印には「飯塚／木村蔵」（朱方印・縦3・2糎・横2・2糎）とある。十二代小林（木村）重治の子十三代目の木村兒叟も言道歌壇の風潮を受け継いでいく。また、言道の『今橋集』上に、「仏事／飯塚 宮崎重徳七回真福寺にて一会法名日貫居士」にてらにまとゐをしてうたなどよめる」などの詞書きが見え、宮崎重徳などその他多くの飯塚の弟子たちとの深い交流を物語る。

さて、この家集『自詠集中抄』（以後『抄』）を見ていくと「六月ばかりさがみのうら賀といふところにあめりかの舟きぬとて、武士

ども東にとゆくを見て」の詞書（233）や、「いのちをも真となしてゑみしらがよるこしふねをうちくだきてむ」（同233番歌）などから、嘉永六年六月アメリカの黒船が浦賀沖に来航した情報が、いちはやく飯塚にも知れ渡っていたことや 夷狄への漠然とした緊迫感も感じる。「いのちをも真となして」と歌にありながらも、心の奥底には神風を信じ「ゑみし（夷狄）」を「うちくだく」勇ましきなどの心意気も伝わってくる。

270の詞書「ふご（豊後）のくに、ゆあみにとてゆきける時」や、274の詞書「かしこの温泉にいたれりけるに」では、大分鉄輪あたりの湯浴を楽しんだことが記されている。後にそれを紀行文としてまとめ、言道の序による『ふごのみちの記』（嘉永五年）として重治は残した。その紀行文の跡付けとなる資料としてもこの『抄』は有効である。また、月々の風雅を楽しみ「月次歌会」を催すなど、普段の日常の中に浸透した歌の会合「まとゐ」の趣をも垣間見ることができる。そして、幕末における庶民の側からの様々な実情や当時の日々の息づかいがこの『抄』を通して聞こえてくる。

重治にはこの『抄』と多くの歌が重なる家集『壬戌詞撰』（文久二年）や、言道との師弟合作の題詠の歌集『萩葉集』（慶応三年頃）などがある。言道の歌に一首一首響きあうように重治が詠う『萩葉集』には『抄』から一歩進んで、重治を筆頭として切磋琢磨し合う飯塚歌壇の厚みと重治の学びの跡が見える。

翻刻に於ける凡例は、初回（第十巻第一号）を参照のこと。清濁は原本の通りとした。

- 2 2 2
しけりあへるくさはに水をかくされて
おとはかりなるまへの小流
- 2 2 3
あきことにたねはまけともわかやとは
ふさはしけなきなてしこの花
- 2 2 4
となりにはうらやむ計さきにけり
かきこしに見るなてしこのはな
- 2 2 5
庭のおものわか(は)にふる雨のおと
しつかなる夏はきにけり 「(30・オ)
- 2 2 6
ほととぎすたゝひとこゑに立さわく
いちゝもしはしゝつまりにけり
- 2 2 7
のりあひのふねなとよみそ郭公
またもつゝみのうへになく也
- 2 2 8
わかすかたふりゆくうらみすかゝみ
てにもふれうくなりにける哉
- 2 2 9
かりそめにおもひしせとのうつき垣
ゆひめとかまし花のさかりは 「(30・ウ)
- 2 3 0
はてはまたちしほなるへきかへるての
わかほにもほふひとしほそかし
- 2 3 1
ふるくさのくちてなりぬる蛍とや
にひくさむらに見えかくれ管
- 2 3 2
川風はふかさなからもなかれゆく
水見るさへにあつさわすれぬ
- 2 3 3
六月はかりさかみのうら賀といふ
ところにあめりかの舟きぬとて 「(31・オ)
- 2 3 3
武士とも東にとゆくを見て
- 2 3 3
いのちをも真となしてゑみしらか
よるこしふねをうちくたきてむ
- 2 3 4
人すまでとしふる間にはの面を
ところえかほに草木生けり
- 2 3 5
うちわたすのてらのかねのひゝきは
夕日のかけにおくりかほなる 「(31・ウ)
- 2 3 6
かやりとてさのみならてそ子規
けふりをよきてよそにこそなけ
- 2 3 7
時のまにすゝしくなりぬ家ことに
みつうちそゝく市の夕暮
- 2 3 8
こもあらはよそのわらはの星染る
今夜のさまをせさせても見む
- 2 3 9
うちまねくすゝきを見れば鶯の
ひとくとなきしそのゝ也けり 「(32・オ)

2 4 0.
ものおもふゆふくれかたにかなしさを
そへてもおつる桐のはのおと

2 5 0.
ゆめに見るにもまとはさゝれす
月影のかさきる見ればあすのよの
るまちふしまちいかゝとそおもふ

2 4 1.
ひかすをは十つゝ十とをまでも
なにかさねつゝおへるこのはな

2 5 1.
よのちりをのかれしやとの月見れば
かゝるいほりにいつかすまゝし」(33・ウ)

2 4 2.
はたおりめたかためとかはしらねとも
こゝろありけに竹むらになく

2 5 2.
ひとりしてよすから月にむかふれば
月と(あれ)との秋にそありける

2 4 3.
かなしきはむしもひとしく鳴ならん
さらは二人の秋にこそあらめ」(32・ウ)

2 5 3.
たまつさをかけてうしてふかり金の
そらかきくらしかすもよまれす

2 4 4.
けふかたになひかぬ秋の夕くれに
みたるゝくもはこゝろなりけり

2 5 4.
きのふみし人もむなしくなれるよを
すてむとおもへは人そいさむる

2 4 5.
しのふれは昔のまゝのありさまを
世にのこせるは月はかりして

2 5 5.
人よりもほたしすくなき身にはあれと
うきよのなかをのかれかねつゝ」(34・オ)

2 4 6.
あさなけにえたうちたれてさきにけり
花おもけなるにはの糸はき

2 5 6.
おもふさまならはしにても見てしかな
なからへはまたうきも多きに

2 4 7.
とめる身はいかてしるへきかへのまの
くつれよりいる月のけしきを」(33・オ)

2 5 7.
こからしのふきはらしぬるそら見れば
さえたる月にこゑありけなる

2 4 8.
なかさしとかはせの月をかけてけり
たかこゝろしてうちしあひくひそ

2 5 8.
真をはくたすかはせのもゝふねを
まもりかほにもなくちとりかな

2 4 9.
うつゝにて見あかぬ秋の月なれば

2 5 9.
ひとしきり吹来風にむらちとり
かなたこなたに友をよふこゑ
「(3 4・ウ)

2 6 0.
なれきそふをちの山の端嶺の雪
かすみかくれに見えずなるらん

2 6 1.
みてのみやたゝにすくへきうめのはな
ひとえは神もつれにをしむな

2 6 2.
法の師もはるはこゝろやうこくへき
いもにまかへてうめかをる夜は

2 6 3.
はつこゑをみ山おろしにうはれぬ
ゆくゑやいつこ野路のうくひす
「(3 5・オ)

2 6 4.
はるたちてひかすよみつゝをるゆひを
ひたけとひらく花もまたなし

2 6 5.
人こゝろひとつならぬにならひてや
のきはの花のさけるさかさに

2 6 6.
みやまよりいこしてうゑしには桜
ならうな
よのうきふしを人に(かたる)な

2 6 7.
西風のゝちにさかむとおそさくら
おそきは早きこゝろなりけり
「(3 5・ウ)

2 6 8.
こゝろなき人にをらるゝ花見れば

まことに
(ことさら)をしきこゝちする哉

2 6 9.
つきてゆくこまのすゝかねとりすてよ
そのひゝきにか花のちるらん

ふこのくにゝゆあみにとてゆきける時
なゝまかりとてさかしき山をこえ
かゝみの山はいつことゝひけるに
はやくあとになりたるといふ時「(3 6・オ)

2 7 0.
かへり見てうたなつかしきかゝ見山
まへにむかひてあらましものを

2 7 1.
なみたゝすなきたるひさへふく風の
すかたなしたるいその松かえ

2 7 2.
たひのそらひことにかはるこゝろ哉
山のけしきの見なれぬを見て

2 7 3.
あはれにもわか身にそひてきつるかな
こや故郷のそのゝ竹村
「(3 6・ウ)

かしこの温泉にいたれりけるに
ゆけふりたかく立を人のよめとい
ひける時

2 7 4.
はるさめはさひしきものを軒にさへ
と一に
くも(かとみ)ゆ(の)けふり(かゝれる)

舟にの(こ)りてかへりける時

275.

わかれこしみなどのかたのなこりとて
ねよとのかねを舟にきく哉

「(37・オ)

276.

そらたかくほはしら山そ見えそむる
わか故郷(や)の(き)しるしに
ちか(く)なるらん)

池萍堂印

「(37・ウ)